

(別添様式)

## 未承認薬・適応外薬の要望に対する企業見解

### 1. 要望内容に関する事項

会社名	ブリストル・マイヤーズ株式会社	
要望された医薬品	要望番号	II-176
	成 分 名 (一般名)	ヒドロキシカルバミド
	販 売 名	ハイドレアカプセル 500mg
	未承認薬・適応外薬の分類 (該当するものにチェックする。)	<input type="checkbox"/> 未承認薬 <input checked="" type="checkbox"/> 適応外薬
要望内容	効能・効果 (要望された効能・効果について記載する。)	本態性血小板血症
	用法・用量 (要望された用法・用量について記載する。)	ヒドロキシカルバミドとして、通常成人 1 日 500mg ~2,000mg を 1~3 回に分けて経口投与する。寛解後の維持には 1 日 500mg~1,000mg を 1~2 回に分けて経口投与する。 なお、血液所見、症状、年齢、体重により初回量、維持量を適宜増減する。
	備 考 (該当する場合はチェックする。)	<input type="checkbox"/> 小児に関する要望 (特記事項等)
現在の国内の開発状況	<input type="checkbox"/> 現在開発中 〔 <input type="checkbox"/> 治験実施中 <input type="checkbox"/> 承認審査中 ] <input checked="" type="checkbox"/> 現在開発していない 〔 <input type="checkbox"/> 承認済み <input type="checkbox"/> 国内開発中止 <input checked="" type="checkbox"/> 国内開発なし ] (特記事項等) 本剤の骨髄増殖性疾患患者を対象として行った国内第 II 相試験及び第 III 相試験において、慢性骨髄性白血病 (CML)、本態性血小板血症 (ET) 及び真性多血症 (PV) に対する有効性及び安全性の検討を行ったが、承認申請は CML のみを対象を行い、ET 及び PV に対する承認申請は実施しなかった。	
企業としての開発の意思	<input checked="" type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし (開発が困難とする場合、その特段の理由)	

<p>「医療上 の必要性 に係る基 準」への 該当性 (該当す るものに チェック し、分類し た根拠に ついて記 載する。)</p>	<p><b>1. 適応疾病的重篤性</b></p> <p><input type="checkbox"/> ア 生命に重大な影響がある疾患（致死的な疾患）  <input checked="" type="checkbox"/> イ 病気の進行が不可逆的で、日常生活に著しい影響を及ぼす疾患  <input type="checkbox"/> ウ その他日常生活に著しい影響を及ぼす疾患  <input type="checkbox"/> エ 上記の基準に該当しない          (上記に分類した根拠)          本態性血小板血症(ET)では、多くの症例は、長期間の血小板数増加にもかかわらず、良好な経過をたどるもの、長期的自然経過で、一部の症例は真性多血症 (PV)、前骨髓性白血病 (PML)、急性骨髓性白血病 (AML) に移行する。また、合併症としては血栓症および出血症状があり、予後を左右するため、これらの予防が治療戦略上重要である。ET 患者における血栓症のリスクは健常者の約 5 倍であり、ET 患者の主な死因は血栓塞栓症や重篤な出血である。</p> <p><b>2. 医療上の有用性</b></p> <p><input type="checkbox"/> ア 既存の療法が国内にない  <input type="checkbox"/> イ 欧米の臨床試験において有効性・安全性等が既存の療法と比べて明らかに優れている  <input checked="" type="checkbox"/> ウ 欧米において標準的療法に位置づけられており、国内外の医療環境の違い等を踏まえても国内における有用性が期待できると考えられる  <input type="checkbox"/> エ 上記の基準に該当しない          (上記に分類した根拠)          ドイツ、フランスにおいて、ET に対する承認を取得している。米国においては、ET に対する承認は取得していないものの、保険適応されている。New England Journal of Medicine 等の学術雑誌、Wintrobe's Clinical Hematology、Williams Hematology、Goodman &amp; Gilman's Pharmacology 等においても本剤が ET に対する標準的治療として用いられる旨が記載されている。          また、本邦においては、社会保険診療報酬支払基金による平成 19 年 9 月 21 日付の審査情報提供事例にて、薬理作用が同様と推定されるとの根拠により、本剤を PV、ET 及び慢性骨髓単球性白血病に処方した場合、保険適用する旨公表されている。</p>
備考	

以下、タイトルが網かけされた項目は、学会等より提出された要望書又は見解に補足等がある場合にのみ記載。

## 2. 要望内容に係る欧米での承認等の状況

<p><b>欧米等 6 か国での承認状況</b>            (該当国にチェックし、該当国の承認内容を記載する。)</p>	<input type="checkbox"/> 米国 <input type="checkbox"/> 英国 <input checked="" type="checkbox"/> 独国 <input checked="" type="checkbox"/> 仏国 <input type="checkbox"/> 加国 <input type="checkbox"/> 豪州																												
<b>[欧米等 6 か国での承認内容]</b>																													
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th colspan="3">欧米各国での承認内容（要望内容に関連する箇所に下線）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="4" style="vertical-align: top; width: 15%;">米国</td> <td style="width: 45%;">販売名（企業名）</td> <td style="width: 40%;">承認なし</td> </tr> <tr> <td>効能・効果</td> <td></td> </tr> <tr> <td>用法・用量</td> <td></td> </tr> <tr> <td>備考</td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="4" style="vertical-align: top;">英国</td> <td>販売名（企業名）</td> <td>承認なし</td> </tr> <tr> <td>効能・効果</td> <td></td> </tr> <tr> <td>用法・用量</td> <td></td> </tr> <tr> <td>備考</td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="3" style="vertical-align: top;">独国</td> <td>販売名（企業名）</td> <td>(要望書からの変更なし) LITALIR 500 mg Hartkapseln (Bristol-Myers Squibb GmbH &amp; Co.)</td> </tr> <tr> <td>効能・効果</td> <td>(要望書からの変更なし) 慢性期又は移行期の慢性骨髓性白血病(CML)、血栓塞栓症合併のリスクが高い本態性血小板血症又は真性多血症</td> </tr> <tr> <td>用法・用量</td> <td>(要望書からの変更なし)  治療は、経験豊富な専門医と血液専門医のみが実施すること。投与量は、実際の体重又は理想体重のうち、少ない方に基づいて設定すること。  CML治療の場合、1日40mg/kgで投与を開始し、白血球数に応じて投与量を決定する。白血球数が<math>20 \times 10^9/L</math>を下回る場合、投与量を50%（1日20mg/kg）減量すること。その後、白血球数<math>5-10 \times 10^9/L</math>が維持できる投与量に調節する。白血球数が<math>5 \times 10^9/L</math>以下になった場合は本剤を減量し、白血球数が<math>10 \times 10^9/L</math>まで回復してから增量すること。  白血球数が<math>2.5 \times 10^9/L</math>以下又は血小板数が<math>100 \times 10^9/L</math>以下になった場合は、数値が完全に回復するまで投与を中止すること。  本剤の効果を判定するのに必要な期間は6週間である。疾患が明らかに進行している</td> </tr> </tbody> </table>		欧米各国での承認内容（要望内容に関連する箇所に下線）			米国	販売名（企業名）	承認なし	効能・効果		用法・用量		備考		英国	販売名（企業名）	承認なし	効能・効果		用法・用量		備考		独国	販売名（企業名）	(要望書からの変更なし) LITALIR 500 mg Hartkapseln (Bristol-Myers Squibb GmbH & Co.)	効能・効果	(要望書からの変更なし) 慢性期又は移行期の慢性骨髓性白血病(CML)、血栓塞栓症合併のリスクが高い本態性血小板血症又は真性多血症	用法・用量	(要望書からの変更なし)  治療は、経験豊富な専門医と血液専門医のみが実施すること。投与量は、実際の体重又は理想体重のうち、少ない方に基づいて設定すること。  CML治療の場合、1日40mg/kgで投与を開始し、白血球数に応じて投与量を決定する。白血球数が $20 \times 10^9/L$ を下回る場合、投与量を50%（1日20mg/kg）減量すること。その後、白血球数 $5-10 \times 10^9/L$ が維持できる投与量に調節する。白血球数が $5 \times 10^9/L$ 以下になった場合は本剤を減量し、白血球数が $10 \times 10^9/L$ まで回復してから增量すること。  白血球数が $2.5 \times 10^9/L$ 以下又は血小板数が $100 \times 10^9/L$ 以下になった場合は、数値が完全に回復するまで投与を中止すること。  本剤の効果を判定するのに必要な期間は6週間である。疾患が明らかに進行している
欧米各国での承認内容（要望内容に関連する箇所に下線）																													
米国	販売名（企業名）	承認なし																											
	効能・効果																												
	用法・用量																												
	備考																												
英国	販売名（企業名）	承認なし																											
	効能・効果																												
	用法・用量																												
	備考																												
独国	販売名（企業名）	(要望書からの変更なし) LITALIR 500 mg Hartkapseln (Bristol-Myers Squibb GmbH & Co.)																											
	効能・効果	(要望書からの変更なし) 慢性期又は移行期の慢性骨髓性白血病(CML)、血栓塞栓症合併のリスクが高い本態性血小板血症又は真性多血症																											
	用法・用量	(要望書からの変更なし)  治療は、経験豊富な専門医と血液専門医のみが実施すること。投与量は、実際の体重又は理想体重のうち、少ない方に基づいて設定すること。  CML治療の場合、1日40mg/kgで投与を開始し、白血球数に応じて投与量を決定する。白血球数が $20 \times 10^9/L$ を下回る場合、投与量を50%（1日20mg/kg）減量すること。その後、白血球数 $5-10 \times 10^9/L$ が維持できる投与量に調節する。白血球数が $5 \times 10^9/L$ 以下になった場合は本剤を減量し、白血球数が $10 \times 10^9/L$ まで回復してから增量すること。  白血球数が $2.5 \times 10^9/L$ 以下又は血小板数が $100 \times 10^9/L$ 以下になった場合は、数値が完全に回復するまで投与を中止すること。  本剤の効果を判定するのに必要な期間は6週間である。疾患が明らかに進行している																											

		<p>場合には治療を中止すること。臨床的に明らかな反応が見られる場合には、治療の継続が可能である。</p> <p><u>本態性血小板血症の場合、1日15mg/kgで投与を開始し、白血球数が4x10<sup>9</sup>/L以下となることを避け、血小板数が600x10<sup>9</sup>/L以下となるよう投与量を調節する。</u></p> <p>真性多血症の場合、1日 15-20 mg/kgで投与を開始する。ヘマトクリットが45%以下、血小板数が400x10<sup>9</sup>/Lになるよう投与量の調節を行うこと。多くの患者では、1日平均500-1000 mgの維持用量となる。ヘマトクリットと血小板数が十分にコントロールできている場合には、継続投与が可能である。</p> <p><b>小児</b></p> <p>小児での罹患は稀であるため、投与方法は明確になっていない。</p> <p><b>高齢者</b></p> <p>高齢者では本剤に対する反応性が明確でないため、より低用量の可能性がある。</p> <p><b>肝・腎機能低下患者</b></p> <p>肝・腎機能低下患者に対する推奨用量は明確になっていない（Section 4.4参照）。</p> <p>カプセルはそのまま飲み込み、口中で溶解しないこと。</p>
	<b>備考</b>	
仏国	販売名（企業名）	<p>(要望書からの変更なし)</p> <p>HYDREA 500 mg, gélule (Bristol-Myers Squibb)</p>
	効能・効果	<p>(要望書からの変更なし)</p> <p>慢性骨髄性白血病、真性多血症、<u>本態性血小板血症</u>、骨髄性脾腫、骨髄線維症</p>
	用法・用量	<p>(要望書からの変更なし)</p> <p>本剤は1日の総投与量に応じて、1-3回に分けて投与する。投与量は実際の体重又は</p>

			<p>理想の体重のうち、低い方を考慮の上決定する。</p> <p><b>慢性骨髓性白血病</b>          導入用量 : 30-50 mg/kg/24 時間          維持用量 : 15-30 mg/kg/24 時間</p> <p><b>骨髓性脾腫</b>          5-15 mg/kg/24 時間</p> <p><b>本態性血小板血症</b>  <u>導入用量 : 15-30 mg/kg/24 時間</u>  <u>維持用量 : 10-20 mg/kg/24 時間</u></p> <p><b>真性多血症</b>          導入用量 : 15-20 mg/kg/24 時間          維持用量 : 10 mg/kg/24 時間</p> <p>特に投与初期において、強い利尿が生じるので注意すること (section 4.4. Precautions 参照)。カプセルを飲み込めない場合には、カプセルの中身をコップの水にあけ、すぐに飲み込むこと (section 6.6 参照)。不溶物が表面に残る。</p> <p>腎機能低下 : 本剤は主に腎排泄されるため、腎機能が低下している患者においては、減量を考慮すること。血液学的パラメーターの定期的なモニタリングが推奨される。</p> <p>肝機能低下 : 肝機能低下患者への投与量調節に関する十分なデータは得られていない。血液学的パラメーターの定期的なモニタリングが推奨される。</p> <p>小児 : 現時点では、小児に対して特定の用量を推奨することはできない。</p>
		備考	
加国	販売名（企業名）	承認なし	
	効能・効果		
	用法・用量		
	備考		
豪国	販売名（企業名）	承認なし	
	効能・効果		
	用法・用量		
	備考		

欧米等 6 か国での標準的使用状況  
 (欧米等 6 か国で要望内容に関する承認がない適応外薬についてのみ、該当国にチェックし、該当国の標準的使用内容を記載する。)

米国     英国     独国     仏国     加国     豪州

[欧米等 6 か国での標準的使用内容]

欧米各国での標準的使用内容（要望内容に関連する箇所に下線）		
米国	ガイ ドライ ン名	
	効能・効果 (または効能・効果に関連のある記載箇所)	
	用法・用量 (または用法・用量に関連のある記載箇所)	
	ガイ ドライ ンの根拠論文	
	備考	
英国	ガイ ドライ ン名	
	効能・効果 (または効能・効果に関連のある記載箇所)	
	用法・用量 (または用法・用量に関連のある記載箇所)	
	ガイ ドライ ンの根拠論文	
	備考	
独国	ガイ ドライ ン名	
	効能・効果 (または効能・効果に関連のある記載箇所)	
	用法・用量 (または用法・用量に関連のある記載箇所)	
	ガイ ドライ ンの根拠論文	
	備考	
仏国	ガイ ドライ ン名	

		効能・効果 (または効能・効果に関連のある記載箇所)	
		用法・用量 (または用法・用量に関連のある記載箇所)	
		ガイドラインの根拠論文	
		備考	
加国	ガイドライン名		
	効能・効果 (または効能・効果に関連のある記載箇所)		
	用法・用量 (または用法・用量に関連のある記載箇所)		
	ガイドラインの根拠論文		
	備考		
	ガイドライン名		
豪州	効能・効果 (または効能・効果に関連のある記載箇所)		
	用法・用量 (または用法・用量に関連のある記載箇所)		
	ガイドラインの根拠論文		
	備考		

		文	
		備考	

3. 要望内容に係る国内外の公表文献・成書等について

(1) 無作為化比較試験、薬物動態試験等に係る公表文献としての報告状況

<文献の検索方法（検索式や検索時期等）、検索結果、文献・成書等の選定理由の概略等>

1)

<海外における臨床試験等>

1)

<日本における臨床試験等>

1)

(2) Peer-reviewed journal の総説、メタ・アナリシス等の報告状況

1)

(3) 教科書等への標準的治療としての記載状況

<海外における教科書等>

1)

<日本における教科書等>

1)

(4) 学会又は組織等の診療ガイドラインへの記載状況

<海外におけるガイドライン等>

（下記、要望書への追加事項）

4) 米国臨床腫瘍学会（ASCO）の診療ガイドライン

記載なし

5) 欧州臨床腫瘍学会（ESMO）の診療ガイドライン

記載なし

<日本におけるガイドライン等>

1)

(5) 要望内容に係る本邦での臨床試験成績及び臨床使用実態（上記（1）以外）について

要望書に記載されている内容に、以下を追加する。

## 1) 要望内容に係る本邦での臨床試験成績について

本邦では、骨髓増殖性疾患を対象に国内第Ⅱ相試験及び第Ⅲ相試験が実施された（要望書の3.(1)<日本における臨床試験等>の項の浦部らの2文献<sup>要望-iii, iv</sup>を参照）。これらの臨床試験成績を考慮し、CMLと比較しET、PVにおいても十分な有用性が確認されたものの、骨髓増殖性疾患の中でも最も代表的な疾患であるCMLに対して弊社は1991年1月に承認申請を行い、1992年7月3日に承認を取得した。

## 2) 国内の製造販売後の使用状況について

本剤は、1992年7月、慢性骨髓性白血病(CML)を適応症とする承認を取得し、1992年7月から2002年7月にかけて使用成績調査を含む市販後調査を実施した後、2002年10月に再審査申請を行った。2007年3月、承認拒否事由に該当しない旨の結果を受領し、本剤の有効性及び安全性が確認された。

使用成績調査における有効性については、安全性解析対象症例1,806例から適応外疾患への使用症例614例（使用理由：本態性血小板血症283例、真性赤血球增加症192例、血小板血症36例、骨髓増殖症候群24例、骨髓線維症18例、赤血球增加症16例、慢性骨髓性単球白血病14例、好中球性白血病11例等）が除外され、1,192例が解析対象とされた。安全性については、調査票収集症例1,807例のうち、承認前使用1例を除外した1,806例が解析対象とされた（ハイドレア再審査報告書2007年1月11日）。

判定不能、不明・未記載を除く（著明改善+改善）/（著明改善+改善+やや改善+不变+悪化）により算出した有効率は、CML 80.0%(920/1150例)、PV 75.7%(143/189例)、ET 78.4%(214/273例)であり、副作用発現率は、CML 29.4%(350/1192例)、PV 19.3%(37/192例)、ET 27.9%(79/283例)であった。

使用成績調査における本剤の1日最大投与量は、CML:500mg～4,000mg、PV:500mg～2,000mg、ET:500mg～3,000mgであった。1日最大投与量の平均は、CML:1,454mg、PV:969mg、ET:963mgであった。1日の最大投与量が500～2,000mgであった症例の割合は、CML:94%（1120/1192例、500mg 122例、1,000mg 362例、1,500mg 364例、2,000mg 272例）、PV:100%（192/192例、500mg 56例、1,000mg 100例、1,500mg 28例、2,000mg 8例）、ET:99%（281/283例、500mg 94例、1,000mg 133例、1,500mg 43例、2,000mg 11例）であり、総投与量(mg)/実投与日数により算出した平均1日投与量の各患者群での平均は、CML:1,000mg、PV:719mg、ET:735mgであった。

使用成績調査症例において、厚生労働省に報告した重篤な副作用は79例109件であり、CML 58例84件、ET 9例9件、PV 5例6件であった。副作用の内訳は、ETでは貧血3件、脳梗塞、細気管支炎、間質性肺炎、好中球減少、白血球減少（症）、骨髓抑制各1件、PVでは脳梗塞、貧血、ヘモグロビン減少、白血球減少（症）、血小板

減少（症）、頭重（感）各1件であった。器官別大分類では、赤血球障害、白血球・網内系障害、血小板・出血凝固障害に分類される事象が多く報告され、骨髓増殖性疾患の原疾患との関連性や、併用薬剤が副作用発現に影響を及ぼしたと考えられた。また、このうち未知・重篤な副作用は、脳梗塞（ET、PVで各1件）、細気管支炎（ETで1件）であった。これらの副作用については、再審査申請時、「使用上の注意」から予測できない副作用として、検討を行った。脳梗塞が発現したET例は、本剤投与開始7年5ヶ月後に脳梗塞（左半身感覺鈍麻）が発現し、CTにて小梗塞巣が確認された。本剤の投与を継続し、3ヶ月後に軽快しており、担当医は、本剤との因果関係は不明と判定している。また、脳梗塞が発現したPV例は、本剤を4年3ヶ月投与し、脳梗塞（しびれ、運動障害、知覚障害）が発現し、CTにて脳梗塞が確認された。本剤の投与を継続し、約6ヶ月後に軽快しており、担当医は、脳梗塞は、年齢を考えると本剤が原因か自然発症的なものは不明とのコメントであった。脳梗塞が発現した症例2例とともに本剤の投与を継続し、軽快しており、本剤との関連が明確ではないことから、「使用上の注意」への反映は行わないとした。また、細気管支炎が発現したET例は、本剤投与31日後に発現し、抗生物質等の投与及びO<sub>2</sub>の投与を行い、25日後に軽快しており、担当医は、抗生剤投与前の血液、喀痰培養は陰性で、ウィルス感染の可能性も疑っており、本剤による直接的な副作用かどうかは不明としていることから、本剤との関連が明確ではないため、「使用上の注意」への反映は行わないとした。

また、ET、PVの症例において、死亡に至った副作用の発現は見られなかった。

#### （6）上記の（1）から（5）を踏まえた要望の妥当性について

##### ＜要望効能・効果について＞

1) CML、ETはともに同じ疾患群である慢性骨髓増殖性疾患に分類される。これらの病態生理学には赤血球、顆粒球、血小板などの1つあるいはそれ以上の系統の血液構成細胞の産生過剰を伴う、多分化能骨髓幹のクローニング増殖が含まれる。欧米ではこれら疾患の慢性期の治療に本剤が中心的な薬剤として使用されている。また、本邦においては、社会保険診療報酬支払基金による平成19年9月21日付の審査情報提供事例にて、薬理作用が同様と推定されるとの根拠により、本剤をPV、ET及び慢性骨髓単球性白血病に処方した場合、保険適用する旨公表されている。以上より、本剤の効能・効果は以下の設定が妥当と考えられる。

##### 慢性骨髓性白血病、本態性血小板血症

##### ＜要望用法・用量について＞

1) 現在、ドイツとフランスにおいてPV及びETに対する承認を取得している。ドイツにおける用法・用量は、CML：1日40mg/kg、PV：導入療法として1日15～20mg/kg、維持療法として1日500～1,000mg、ET：1日15mg/kgである。フランスにおいては、CML：導入療法として1日30～50mg/kg、維持療法として1日15～30mg/kg、PV：導入療法として1日15～20mg/kg、維持療法として1日10mg/kg、

ET：導入療法として1日15～30mg/kg、維持療法として1日10～20mg/kgであり、独仏両国とも、CMLと比べPV、ETに対する用量は低く設定されている。

本邦にて実施された第Ⅱ相、第Ⅲ相試験では、ET、PVに対してもCMLと同じ用法・用量が設定された。第Ⅱ相試験では、1日500mg～2,000mgを1～3回に分けて経口投与、国内第Ⅲ相試験では、治療量として1日500mg～2,000mgを1～3回に分けて経口投与、維持量として1日500mg～1,000mgを1～2回に分けて経口投与された。また、再審査期間中に実施した使用成績調査においても、ET、PVに対しても、現在承認されている用法・用量の範囲内で投与されていた症例がほとんどであった。

以上より、本剤のETに対する用法・用量については、化学療法に精通した医師により、適切に副作用が管理され、必要に応じて減量・休薬がなされるのであれば、承認されているCMLと同様の用法・用量で管理可能と判断されることから、本剤の用法・用量は以下の設定が妥当と考えられる。

ヒドロキシカルバミドとして、通常成人1日500mg～2,000mgを1～3回に分けて経口投与する。寛解後の維持には1日500mg～1,000mgを1～2回に分けて経口投与する。

なお、血液所見、症状、年齢、体重により初回量、維持量を適宜増減する。

#### <臨床的位置づけについて>

本剤はドイツ、フランスにおいて、ETに対する承認を取得しており、米国においては、ETに対する承認は取得していないものの、保険適用されている状況である。また、New England Journal of Medicine <sup>要望-i、要望-ii</sup>等の学術雑誌、Wintrobe's Clinical Hematology <sup>要望-vii、要望-viii</sup>、Williams Hematology <sup>要望-ix、要望-x</sup>、Goodman & Gilman's Pharmacology <sup>要望-xi</sup>等における記載からも、本剤がETに対する標準的治療として用いられていると思われる。

本邦にて行われた大規模調査において、本態性血小板血症の患者381名のうち48.6%に本剤が投与されており<sup>要望-xv</sup>、本邦においてもETに対して本剤が汎用されている実状が伺える。本剤はETに対する標準的な治療法の一つとなると考えられる。

#### 4. 実施すべき試験の種類とその方法案

1) 要望内容に関してエビデンスに不足している点はないと考える。

#### 5. 備考

<その他>

1)

#### 6. 参考文献一覧

参考資料1 独国添付文書

参考資料 2 仏国添付文書

(以下、要望書に記載あり)

要望-i Claire N. et al: Hydroxyurea Compared with Anagrelide in High-Risk Essential Thrombocythemia. *N Engl.J.Med.*353(1):33-45,2005

要望-ii Cortelazzo S. et al: Hydroxyurea for patients with essential thrombocythemia and a high risk of thrombosis. *New England Journal of Medicine.* 332(17):1132-6, 1995

要望-vii Wintrobe's Clinical Hematology, 12th ed. vol.2: 1352-1360, 2009

要望-viii Wintrobe's Clinical Hematology, 12th ed. vol.2: 2031-2044, 2009

要望-ix Williams Hematology, 8th ed.1223-1236, 2010

要望-x Williams Hematology, 8th ed.1237-1247, 2010

要望-xi Goodman & Gilman's Pharmacology<IX. Chemotherapy of Neoplastic Diseases>Juvels

要望-xv Dan K et al. Clinical Features of Polycythemia Vera and Essential Thrombocythemia in Japan: Retrospective Analysis of a Nationwide Survey by the Japanese Elderly Leukemia and Lymphoma Study Group; *International Journal of Hematology* 83(5):443-449,2006